聖　書：創世記 17：15〜27
説教題：その日のうちに
日　時：2023 年 8 月 13 日（朝拝）

神はアブラムが 99 歳の時に彼に現れてご自分を全能の神として示され、すでに与えておられた契約に関して新しい内容を明らかにされました。神はアブラムを多くの国民の父とすること、従って彼の名はアブラムからアブラハムへと変えるべきこと、また契約のエッセンスは「わたしは、あなたの神、あなたの後の子孫の神となる」（7 節後半）というものであること、そして彼らにカナンの全土を与えることなどが語られました。一方、この契約にあずかるアブラハムには割礼を受けることが求められました。これは神と契約関係にあることのしるしでした。それは肉の上に刻まれます。その作業は言うまでもなく大変な痛みを伴います。しかしこれはアブラハムとその子孫が神と契約関係にあることをいつも確信するためのものです。弱い信仰が支えられ、助けられて、契約を結んでくださっている神をいつも見上げて歩むためのものです。さてアブラハムはこの主の命令にどう応答したのでしょうか。

その前に主の言葉がさらに続いています。15 節以降で主はアブラハムの妻サライについて語られました。アブラムがアブラハムへと名前が変えられたように、サライもここで新しくサラへと名を変えられます。サライとサラではどのように意味が異なるのでしょうか。これに関してはアブラムとアブラハムほどはっきりした意味の違いを見ることは困難なようです。どちらも「女王」とか「王女」を意味する言葉のようで、サライという言葉の方がより古い言い方のようです。二つの言葉の間にどのようなニュアンスの違いがあるかについてはいくつかの意見があるようですが、サラの名が意図しているところははっきりしています。16 節にサラは「国々の母となる」ことが述べられています。これは 4 節でアブラハムが「多くの国民の父となる」と言われていたことに対応します。アブラハムが多くの国民の父となるように妻サライもサラという名に変えられ、国々の母となるのです。これと関わっているのは神がサラによってアブラハムに男の子を与えると語っていることですね。16 節で主は「わたしは彼女を祝福し、彼女によって必ずあなたに男の子を与える」と言っています。これまでこの点ははっきりしていませんでした。神はアブラハムから出て来る者が跡を継ぐ者となるとは言われましたが、それはサラを通してであるとは明示していませんでした。そこでアブラハムはなかなか子が与えられない中、女奴隷ハガルを通して子をもうけ、

そのことで家庭内にかえって災いと苦しみをもたらしてしまいました。しかしこの 17 章でサラを通してアブラハムに子が与えられることが明らかにされました。その結果、サラは国々の母となり、諸々の民の王たちが彼女から出て来ることになります。

アブラハムはこれにどう応答したでしょうか。17 節に「アブラハムはひれ伏して、笑った」とあります。主の言葉の前で恐れをもってひれ伏しつつも下を向いた彼の顔は笑っていました。これはどういう笑いだったのでしょう。それは続く「　」の中の言葉から分かります。アブラハムは心の中で言いました。「百歳の者に子が生まれるだろうか。サラにしても、九十歳の女が子を産めるだろうか。」　一言で言えば不信仰の笑いです。信じられない！そんなバカなことがあるだろうか！これまでは彼もサラから跡継ぎが生まれることを待ち望んで来ました。しかしその導きはないようだと考えてハガルを通して子どもをもうけました。あれから 13 年も経過しています。自分は今 99 歳で、あと 1 年で 100 歳。サラも 90 歳。主は一体何を仰っているのだろうか。そんなことを頭に思い巡らして思わずおかしくなって吹き出してしまったアブラハムの姿がここにあります。そこで彼は神に言いました。「どうか、イシュマエルが御前で生きますように。」　一見、わが子を思う父の祈りのように聞こえますが――確かにアブラハムはイシュマエルの祝福を願う父でしたが、――これは直前で語られた主の言葉を否定する発言です。今さらサラを通して子が与えられるなんてあり得ない。ですからすでにいるイシュマエルが祝福されますように！主がこうして我が家を祝福してくださいますように！と彼は祈ったのです。

それに対して神ははっきりと「いや、あなたの妻サラが、あなたに男の子を産むのだ」と言われます。またその子を「イサク」と名づけなさいとまで言われます。イサクという言葉には印がついていて欄外の注を見ると「彼は笑う」の意とあります。これは明らかに直前でアブラハムが笑ったことと関係していますね。ここにどういう意味が込められていたのでしょう。アブラハムはこれから生まれて来る子に「イサク」とつけることによって、自分が笑ったこの時のことを思い起こさせられるでしょう。自分は主の言葉をすぐには信じなかった。不信仰だった。それで笑ってしまった。しかしこれは単にアブラハムの不信仰を永遠に責めるための皮肉ではなかったと思います。確かにアブラハムは不信仰によって笑ってしまいました。しかし神はアブラハムの理解を超えるみわざを行ってくださり、奇跡的な力を持ってついには良い意味での笑いを与えてくださるのです。アブラハムはその子にイサクと名づけることによっ

て、人間には不可能なことでも神には可能であることをいつも覚えさせられるのです。イサクという名を呼ぶごとに、人間の思いをはるかに超えて大きい神の恵みを覚えて賛美し、その神に一層信頼する者であるようにと導かれることになるのです。

主は 20 節で「イシュマエルについては、あなたの言うことを聞き入れた」と言います。神は彼を祝福し、大いに増やし、彼は 12 人の族長たちを生むとあります。これは将来のイスラエル 12 部族に対応し、それと同じような祝福を与えてくださるという意味でしょうか。しかしわたしの契約を立てるのはイサクとの間にであるとあります。創世記 3 章 15 節で神が与えた、やがて女から出る一人の子孫を通して人間を救うと言われた原始福音はアダムからセツ、エノシュ、エノク、ノア、セム、そしてアブラハムへと受け継がれて来ました。この約束を担うのはイサクであると言われたのです。そのイサクの誕生は来年の今ごろであるということもここで言われました。その時期もはっきり示されました。そうして神はアブラハムと語り終えて、彼のもとから上って行かれたと 22 節に記されています。

さてこれに対してアブラハムはどう応答したでしょうか。23 節以降に記されているのは、彼は主の命令に従順に従ったということです。注目に値することは、22 節に「神はアブラハムと語り終えると、彼のもとから上って行かれた」とあったことです。つまり主はこの場からいわば去って行かれました。この場にはもういませんでした。主が引き続きこの場におられて、アブラハムがどうするかを監督しているという状況ではありませんでした。そういう意味で今すぐこれをしなければならないというプレッシャーはありませんでした。これからどうするか、ある意味でアブラハムは自由でした。そんな主が去って行かれた後だったのに、アブラハムはさっそくこれを実行したのです。これがいかに彼の自発的な応答だったかが分かります。主が去って行かれ、この場におられない状況で彼は直ちにこの作業に取り掛かったのです。

23 節で強調されていることの一つは彼が「神が彼に告げられたとおり」行ったことです。自分が割礼を受け、その子イシュマエルが割礼を受けただけではありませんでした。主は 10 節で「あなたがたの中の男子はみな、割礼を受けなさい」と言っておられました。12〜13 節では「家で生まれたしもべも、異国人から金で買い取られた、あなたの子孫ではない者もそうである。あなたの家で生まれたしもべも、金で買い取った者も、必ず割礼を受けなければならない。」と言われていました。アブラハムはその

通り、「彼の家で生まれたすべてのしもべ、また、金で買い取ったすべての者、すなわち、アブラハムの家のすべての男子を集め、神が彼に告げられたとおり」行ったのです。そして「その日のうちに」それを実行したとも言われています。彼は主に従うことを遅らせませんでした。明日になってもう一度よく考えてからどうするか決めようという態度ではありませでした。彼の心に迷いはなかったのです。彼の心は決まっていました。ですから即日決行したのです。実際にはどれだけ大変な作業だったでしょうか。創世記 34 章 25 節を見ると、割礼を受けて 3 日目の者たちは傷が痛んで、敵に襲われても戦闘不能だったとありますように、このしるしを受けた後しばらくは普通の生活ができないほど激しい痛みと戦わなければなりません。アブラハムの家の中にこれに反対する人たちは出なかったのでしょうか。しかし結果は皆が従ったのです。皆がアブラハムの指示に従い、神の民のしるしを受けて歩むことに同意し、これを実行しました。これはアブラハムが 99 歳、イシュマエルが 13 歳の時でした。26 節にはもう一度、「その日のうちに」これを行ったということが繰り返され、強調されています。最後の節には彼の家の男たちはみな一緒にこれを受けたことが改めて述べられています。

この日、一家をあげて主との契約関係にあるしるしである割礼をその身に受けたアブラハムの心にはどんなに大きな喜びと希望が満ち溢れたことでしょう。アブラハムが 12 章で主の召命に従って以降、13 章と 14 章は特に土地の約束に関することに焦点が当てられ、15 章以降は子孫に関することに焦点が当てられて来ました。15 章最初の時点ではアブラハムの心は心配で特徴づけられていました。主は彼に「恐れるな」と語りかけ、あなた自身から生まれ出て来る者があなたの跡を継がなければならないと言われ、さらに彼を外に連れ出して天の星を仰がせ、あなたの子孫はこのようになると約束されました。アブラハムは主を信じ、その信仰が義と認められたとありました。しかし彼はその後の 16 章で失敗しました。人間的な方法で子を得ようとして自らに災いをもたらしました。それから随分と時間が経った 17 章。ここでもアブラハムは主の言葉を聞いて最初は笑いました。とても信じられませんでした。しかし主に導かれて最後は信じました。年老いた自分とサラに主が子を与えてくださることを本当に信じて割礼を受けました。その信仰について、ヘブル人への手紙 11 章 11〜12 節にこうあります。「アブラハムは、すでにその年を過ぎた身であり、サラ自身も不妊の女であったのに、信仰によって、子をもうける力を得ました。彼が、約束してくださった方を真実な方と考えたからです。こういうわけで、一人の、しかも死んだも同然

の人から、天の星のように、また海辺の数えきれない砂のように数多くの子孫が生まれたのです。」　15 章最初の時点では不安に揺れていたアブラハムが、17 章終わりの時点ではしっかりと主に望みを置いて立っています。ですからアブラハムがここでこのようにあったのはただ主の恵みによることです。主の憐れみと忍耐深い導きによることです。と同時に、その恵みにあずかってアブラハムが主への信仰を行いに現したことにも良く注目する必要があると思います。彼は主への信頼と感謝を一家全員割礼を受けることにおいて現しました。しかも「その日のうちに」彼はそうしました。このように応答した彼に、いよいよ神の約束は実現されて行くこととなるのです。

この箇所は今日の私たちにどう適用されることでしょうか。神はアブラハムへの約束を果たし、ついに救い主キリストを誕生させ、その方によって「地のすべての部族はあなたによって祝福される」という約束を成就されました。今や異邦人である私たちがこうして神を信じて歩む神の民とされています。その私たちもアブラハム同様、ただ恵みによって支えられている者たちですが、私たちもまた神との契約関係に中に生かされている者たちとして主に応答する歩みが求められています。その一つはこの 17 章で見た旧約時代の割礼に対応する新約時代の洗礼を受けることです。神はこの神の民としてのしるしを受けよ！と言っています。私たちは感謝してこれを受けるべきです。また神が「わたしはあなたとあなたの後の子孫の神となる」と言われ、契約のしるしを子どもたちにも与えるようにと言ってくださっていることを感謝して、今日の私たちもアブラハムの子孫として同様に行うべきです。しかし主に従う応答の歩みとは単に洗礼を受けることだけにとどまるものではありません。それは神が命じるすべてのことに従うことも含みます。それらは恵みをもって導いてくださっている神への感謝の応答であり、返礼的応答です。今日の箇所で主への信仰を従順な歩みに現したアブラハムは、後にイサクをささげることにおいてさらにはっきりとそのことを現します。そのような従順の歩みに私たちの信仰は具体的に現されて行かなければならないということを私たちは今日の箇所から教えられるのです。

神はアブラハムに「わたしはあなたの神、あなたの後の子孫の神となる」と言われ、アブラハムはこの契約を結んでくださっている主に感謝し、主を信じて、その信仰を主に従う歩みに現しました。この「わたしはあなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる」という契約のエッセンスは以後聖書の中で繰り返し述べられ、最終的に聖書の一番最後のヨハネの黙示録 21 章 3〜4 節で次のように成就します。「見よ、

神の幕屋が人々とともにある。神は人々とともに住み、人々は神の民となる。神ご自身が彼らの神として、ともにおられる。神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しみもない。以前のものが過ぎ去ったからである。」　今はまだその途上にあるという意味で日々戦いの中にある私たちですが、神はキリストを信じるアブラハムの子孫である私たちを同じ契約の中で導いてくださっています。私たちもこの創世記 17 章で神が示された「わたしは、あなたの神、あなたの後の子孫の神となる」という主との親しい恵みの契約関係の中に生かされていることを信じ、感謝している者として、主が言われることに従う応答の歩みをささげる者でありたいと思います。そしてこの神を私の神として持つ幸い、この神によって必ず最善の祝福へと導いていただける神の民の幸いに生きる者とされて行きたいと思います。